

SCOUTING 茨城

1995年・10月☆茨城県連盟広報委員会発行

第1回オーストラリア派遣特集号

『オーストラリアを旅した人は、きっと心の中に、美しい永遠のオーストラリアが生まれるに違いない』といわれている茨城県連盟第1回のオーストラリア派遣が平成7年3月25日から始まった。

首都のキャンベラでのホームステイは、派遣団員の

心に大きな感激を刻んだようであった。

この夏休みに2~3名の団員が、お世話になったホストファミリーの家庭を再び尋ねているようである。

その素晴らしい体験談を載せて特集号といたしました。

(堀江)



日本大使館にて
天木公使と記念撮影

オーストラリア派遣を終えて

派遣団長 吉田孝俊

シドニー日豪文化交流協会の小倉理事長からの、日豪ボーイスカウトの交流をしてはとの提案により、平成6年2月にキャンベラ・メルボルン・シドニー各連盟の役員との打合せのため、川又副理事長と福江事務局長の3人でシドニー空港に降り、戸倉理事長とお逢いして趣旨の説明を聞くことから始まり、キャンベラでの州役員と豪州労働党院内総務のラモンド議員（その後副総理）やガールスカウト役員とのレセプションにより、キャンベラ市のボーイスカウト関係者・政府関係者などとのコンタクトを取ることが出来た。

また、豪州日本大使館を訪問し、長谷川大使・天木公使にお逢い出来て、日豪スカウトの交流のご支援についてお願ひする。長谷川大使は茨城町波崎町の出身でもあり快く引き受けくださった。

その後、メルボルン連盟のシンプソン豪州国際コミッショナーとのレセプションにより、是非メルボルンへとのお誘いもあった。

次にシドニー連盟を訪問し、州役員のトマスさんと種々派遣について協議のうえ、ホームステイはキャンベラ・キャンプはシドニーにしてはとの提案があり、帰国後理事会の承認を受けてこの派遣は始まった。

昭和60年から5回にかけて開催された「ハワイ・オアフ島」へのシニア一派遣は、ホームステイも無く、ハワイ連盟との交流もないため、回を追う事に参加者も減り、不評の中に中止せざるを得ない現状となった。

今回は、この5回までの派遣には無かった、ホームステイによる豪州の家庭生活の体験と、各州スカウトの交流に重点を置いて、秋から準備委員会を設置して万全を期して計画した。

3月19日県立青少年会館で、多くの保護者の皆さんのお出席のもと結団式を開催し、派遣団本部員・隊指導者とともに「楽しく・事故もなく・実のある」派遣を誓い合った。

平成7年3月25日、数回にわたって準備訓練を終えたシニアスカウト17名、白土隊長と種田副長、川又・堀江・武田・中島本部員とともに白石理事や各保護者の見送りを受けて成田を飛び立った。

キャンベラ空港では、州役員やホストファミリーの出迎えを受けキャンベラ連盟の歓迎式の後、国際コミッショナーのBrenda de Bes女史の割り当てにより、各家庭に2名ずつが紹介されて、グリフィン湖畔での

家族とのランチボックスによる昼食後、彼らと別れた。

3月27日は月曜日のため、スカウトたちはホストファミリーとは別に豪州日本大使館を訪問し、天木公使から会議室で戦後50年の豪州について話をいただき、普段違うことのできない公使から話を聞いただけでも、大きな収穫であったと思う。その後、州役員の案内で、キャンベラ州野営場の見学・昼食後キャンベラの観光地を見学し、牧歌的大自然を満喫した。

3月28日午後、シドニーの「ペーデンパウエル・スカウトセンター」に到着する。1931年にペーデン・パウエル夫妻が訪問された由緒ある野営場であり、ここでキャンプが出来たことは、スカウト関係者にとっては大きな感激である。

4月2日午後、シドニー連盟役員のアルバート・スタムさんご夫妻が野営場を尋ねてくださった。スタムさんは堀江事務局長の友人であり、奥さんは日本人なので日本語で話せるので有り難い。

この野営場で多くの、シドニーの指導者やスカウトと交歓することで国際交流ができたことは、参加したシニアスカウトには感慨深い良き思い出となつたことと思う。

毎日通う近くのスーパーマーケットの店員たちとも皆仲良くなつて楽しい食事が出来たことも、今は良き思い出となつたと思う。

キャンプの6日間の1つの班（4名）の食事代は2オーストラリアドル（1ドル日本円で80円）で3食の献立は班長に任せた。肉や野菜、果物は1kg単位で、日本の4分の1以下、班によつては200ドルで残したところもあり、この方法も面白いやり方であった。

スカウトたちは、世界に通じるこの制服と三指の敬礼が本当に国際的であるこの実感をしみじみと感じたことと思う。もはや民族や国情・言語・政治・イデオロギーを越えたスカウトの世界をそれが理解したことであろう。

11日間のこの派遣が、多くの派遣団本部員や指導者の並々ならぬ努力と情熱によって、スムーズに運営できたこと、キャンベラのホストファミリーの心暖かい歓迎、各州役員のおおらかな歓迎により、楽しい、実のある国際友情が培われたことを、これから的人生の「糧」として、いつまでも思い出にしてほしいと思います。

オーストラリア派遣雑感

派遣団長付 堀 江 郁 男

シドニーの日豪文化交流協会の戸倉理事長の提案により、日豪ボーイスカウトの交流をすることで、平成6年2月にキャンベラ・メルボルン・シドニーを1988年の第16回世界ジャンボリーに日本派遣団員として参加した。オーストラリアに8年振りに旅行して、各州の連盟役員と派遣についての打ち合わせを行い、平成7年3月25日から第1回オーストラリア派遣団が吉田派遣団長以下本部員5名、隊指導者2名、スカウト17名で成田空港を出発した。

「オーストラリアを旅した人は、きっと心の中に、美しい永遠のオーストラリアが生まれるに違いない。

コアラを抱き、大自然の牧歌的な山野でカンガルーと遭遇し、暖かい南太平洋の波に身を任せ、奥地では、大自然の交響詩と神話へのさそい。

1日のキャンプが終わる頃、太陽はあかね色に輝いて、そして消えていく。

夜は、満天の空に輝く星の群れ、なかでも大きく輝く南十字星。

この素晴らしい新天地のオーストラリア。

1度旅した人は、忘れずに再び訪れると言われているオーストラリア』
に私の3度目の旅が始まった。

シドニー空港から36人乗りの揺れに揺れたプロペラ機で、オーストラリア首都のキャンベラ空港へ。

空港には州役員と、ホストファミリーの家族とスカウトが待ち受けており、世界ジャンボリー時にお世話になった州の国際コミッショナーのBrenda de Bes女史と8年振りに再開し、今回も彼女がホームステイ先をお世話くださいり、早速割り当てをお願いした。

吉田団長からホストファミリーへのお願いのスピーチの後、グリフィン湖畔での昼食後、三々五々、期待と不安を抱きながら各家庭に。

3月27日は月曜日で、オーストラリアのスカウトたちは学校があるため、我一行は州役員の案内により、州連盟の野営場での昼食（各家庭からランチボックスを持参）、バスにてティードビンビラにあるNASAのスペースセンター（人工衛星追跡所）と、州の自然保護区で貴重な原産動物であるコアラをはじめ、エミウなど珍しい動物とのふれ合い。

3月28日は、昨年特別にお願いしていた「日本大使

館」を訪問できて、天木公使からお話をいただき、大使館前で記念写真を撮って団員も感激していた（普段は一切訪問できない場所です）。

午後3時にシドニーの「ペーデンパウエル野営場」に到着し、設営する。この野営場は、1931年にペーデンパウエルご夫妻が、指導者訓練の野営場として訪問され、今でも「サイン帳」が残っており、我々も全員このB Pのサイン帳に記帳することができて感激した。

キャンプも当初計画した「日豪親善キャンプ」も学校の都合で思うように行かず、夜遅くから始まるのに閉口した。参加した団員も期待はずれだったと思う。それに加えて、広大なオーストラリアの国民性により「のんびり」していて、気をもむのは日本人だけ、言葉もオージー英語特有のナマリにはどうすることもできなかった。また、朝早くからの野鳥（オオム等）のサエズリには閉口した。

4月2日朝、世界ジャンボリー以来親しくしているスタムさん夫妻から電話が掛かり、午後訪ねて来られ、2年振りに再開した。スタムの奥さんは東京生まれの日本人であり、彼は岩井のわが家にも2回泊まりがけで来ているし、ご夫妻が来日するときはいつも日本連盟とともに東京で夕食会をする仲もあり、スタムも日本語が上手なのでとても助かった。

4月2日に撤営し、6日間のキャンプも終わりシドニーのホテルに。

4月3日はシドニー湾クルーズ、水族館見学などを楽しんだ。

11日間の第1回オーストラリア派遣も、事故もなく病気もなく楽しい懐かしい思い出を残して、素晴らしい体験をされたことだと思います。

オーストラリアでは、「自分の行ったところが、すべてオーストラリアでは1番」という言葉の通り、人造都市である素晴らしいキャンベラと歓迎してくださったホストファミリーを通じて、多少なりともオーストラリアの人々の生活や、文化・伝統を知り、スカウト活動の一端を知り得たことは貴重な体験となったと思います。

第2回は、この体験を生かして更に充実した内容にするよう、スタムにお願いしてプログラムを組み立てたいと反省している。

派遣に対して、6枚のFAXを関係者に送付したが、返事のあったのはたった1枚。おおらかさを通り越したのんびりには、日本人として本当に気がもめて困った。

オーストラリア

派遣日誌より(抜粋)

派遣隊長 白土是清

4月3日 晴れ

モーニングコールは7時半だが、6時過ぎには目が覚める。昨夜は最初で最後のホテルで9日分のあかを落として快適な一夜を過ごし、今朝は、明日の今頃は日本かと、すっかり肩の荷が降りたような気持ち。しかし、今日一日と帰りの飛行機のことを考えて、気を引き締める。

午前中、オペラハウス、シドニー湾クルーズ、水族館等市内見学の後、シーフードレストランで遅めの昼食。シドニーの味をゆっくり楽しんでから、ある免税店で最後の行事——お土産の買い足し。2時間もの間、店内をうろうろしていた者、買い物はそこそこに街中に飛び出し、かなり遅くまで散策した者、皆それぞれにシドニーでのひとときを貪るように楽しんでいる。

今日でオーストラリアともお別れという思いがあるからか、スカウト諸君は皆、バスの中でも船上でも歩いて見学中の時も、この9日間の思い出話に花を咲かせていた。聞くともなく聞いていると、10人が10人とも異口同音に、キャンベラのたった2日間のホームステイが、それぞれに家族やその交流のしかたが違っていても、どんなに楽しかったか、別れが惜しかったかとか、シドニーでのキャンプ中の交流やハブニングについてとか、いつかまた是非来たい、中には将来定住したい、今度の夏休みにひとりで来るぞ等々……形ばかりの隊長の役しかできず、内心忸怩たる思いの私にとっては彼ら派遣隊スカウトたちからのこの上ないプレゼント。

今、午前2時。回りを見るとスカウトの諸君は、心は早や日本か、それともまだオーストラリアか、皆眠っている様子。団長以下リーダーの皆さんもぐっすりとお休みのようで、さぞお疲れになったことでしょう。対外的な全ての交渉や対応、われわれ隊リーダーの食事の世話まで本当にありがとう。中島団員には、写真とビデオの撮影だけでも手いっぱいなのに、隊やスカウト1人ひとりの面倒までみてもらいました。種田副長も頭や手足を放り投げるように今寝っています。特にキャンプ中はスカウトと生活を共にし、いろいろなプログラムにスカウト同様積極的に参加してくれましたね。JTBの東海林さん、お年寄り(?)の中に入っ

ていかがでしたか。セイ服を着た気分はどうでしたか、計画の当初から最後まで御苦労様。中でもあなたの実用英会話には感心しました。私のエー・アーで始まる教室用の英会話では全く通用しなかったから余計です。

有難う。17名のスカウトの諸君と7名の成人同行者の皆さん、有難う。オーストラリアの皆さん有難う。あと4時間後、しっかりと日本の地を踏むまでちょっぴり心配だが、これまで無事故のカンタス航空とこのQF021便に感謝しつつおやすみなさい。

派遣隊のスカウト諸君へ

派遣団本部員(広報担当) 中島清行

「自らチャンスを求めて」

これは私が指導者になったばかりの頃の講習会で、ある講師から贈られた言葉だ。その言葉を数年前に突如思い出した。いろいろな意味で壁にぶつかり気力も衰えていた頃のことだった。

「まあ、とりあえず何かをやってみよう…」

気持ちをマイナスからプラスに切り換えるべく奮立たせ、重い腰を上げて、立ち上がって辺りを見回してみると、いろいろなことが目に飛び込んできた。

試しに1つまんでみる。

「おやっ!!」

2つ目に手を伸ばしてみる。

「お、おもしろい!!」

味をしめて次々と積極的にやってみる。と、どんどん自分の世界が広がっていくではないか、と同時に、多くの仲間が増えていった。

いつしか気力も回復、いや以前にも増して沸き上がっていた。—— そこが指導者としての第2のスタートラインだったのかもしれない。

しかし、別な意味ではそこからがたいへんだった。自分の気持ちを実行に移すためには、団・隊・スカウトそして何よりも家族の協力が必須である。それらの環境を作りつつ、今まで以上のことをやっていかなければならない。もちろん仕事もおろそかにはできない。一方でスカウティングに関する研究にも、自分の技能アップにも取り組まなければならない。時間は限られている。その中でこれだけのことをやるには、まず「健康」が第一だ。そうだ体力作りもしなければ……うわあ、なんだなんだ？こんなにできるのか？ほんとに体が持つのか？

ええい！ やれるだけやってやれいっ！――

そして、オーストラリア。

出国時には期待と不安が入り交じっていた君たちの表情は、成田に着いた今は、満足と自信に満ちたものに変わっている。この11日間、とにかく積極的に動き、いろいろな体験をしてきた。良いことも悪いことも全てをひっくるめて、素晴らしい11日間だった。君たちにとっても私にとっても、成し遂げた喜びを味わうことが出来たろう。

この11日間の派遣で感じたこと、触れたこと、培ったこと、その他もろもろ皆それぞれ違うとは思うが、それを「良い思い出」に留めないでほしい。そこから更なる前進をしてほしい。英会話を勉強するぞ、ローバーマートに行くぞ、オーストラリアの大学に行くぞ、ホストファミリーに会いに行くぞ……等々、派遣期間中に君たちのいろいろな抱負を聞いた。それは君たちがこの派遣を通して受けた「感動」から湧き出てきたものだろう。その時は心からそう思ったんだよな。感じたら動こうぜ、次はどうしたらいいんだい？立止まらずにビジョンを持って進もう。それがスカウトってもんじゃないかな。チャンスは数限りなくあるけど、それ待っていてはダメだ。自ら求めてチャンスを掴んでもらいたい。

これから先、いろいろな場所でいろいろな機会に、君たちと顔を合わせることと思います。君たちがローバーや指導者になったとき、どれだけ輝いているかを楽しみにしています。今後の君たちの活躍を期待しています。

オーストラリアの 海外派遣を終えて

派遣隊副長 種 田 翔 大

私達は第1回のシニア海外派遣として3月25日から4月4日までの11日間、雄大なオーストラリアに行きました。現地ではホームステイ、キャンプをしてきました。

私は派遣隊の副長として参加しました。派遣のお話をいただいた時は、不安でいっぱいでしたが、行くまでの集会に参加する毎に、リーダー、スカウトのみんなとも親しくなり、出発の時となりました。

団長さんをはじめ、隊長さんリーダーの方にアドバイスをいただきながら、スカウトと共に活動できましたことに感謝いたします。班をまとめたり、色々と手助けをしてくれた班長のみんな、どうもありがとうございました。

スカウト全員、日本では体験できない活動、ホームステイ、キャンプなど参加でき無事に帰ってこれた事は、大変良かったと思います。

私が今回の派遣で印象に残っているのは、橋の上のオーストラリア隊の入隊式に参加できたことです。橋の中央に国旗をたて、ちかいの式を行うというには大変驚きました。

ホームステイも現地の人々の生活に接することができ、良かったと思います。キャンベラのホストファミリーには大変お世話になりました。もう一度遊びに行きたいと思います。

今回の派遣団での体験を生かし、これからも原隊でスカウトと共に学んでいきたいと思います。

第2回にも参加できるのであれば参加したいと思います。この11日間の体験は、これからスカウト活動にも大変役立つ事だと思います。

本当にありがとうございました。

オーストラリアで

感じた何か

ウォンバット班 千代田1団 佐 藤 隆

今回、茨城県連盟の第1回オーストラリア派遣隊の1人としてオーストラリアに行きました。しかし、オーストラリアでの様々な生活・体験はこれからの自分のやりたい事が見つけることができる貴重な体験となりました。いろいろなことがあったので覚えている限りの自分の感じたこと、思ったことを書いていきたいと思います。

総合的に見て最初に思ったことは、自分が思っていたより英会話ができたということでした。できたと言っても、やはりドタババになるとさっぱりのところもあり、まだまだ勉強の余地があると思います。

次にシドニーとキャンベラについて、キャンベラは自然と建物がうまい具合に調和していて、シドニーは本当に凄いと思いました。ダーリング・ハーバーホテルのまわりは大都市といった感じで、特に夜見たオペラハウスとシドニーブリッジは最高でした。また、大都市とは言っても東京のようなゴミゴミした感じではなく、いい所でした。後、物価が安い。中でも食料品は安く、マクドナルドの安さにはびっくりしました。

次にホームステイについて、当初2人の予定が1人になってしまい、最初は困ってしまいました。が、後から考えてみると自分の中では大きなプラスとなりま

した。ホストファミリーの家族は4人十犬でした。わずか3日間でしたが、ゲームをしたり、バスケットをしたり、犬の散歩をしたり、数え切れない体験をさせてもらいました。茶道の披露もなかなか好評でした。後、南十字星を教えてもらい、見たときはすごく感動しました。

まだまだたくさんの体験をしました。本当に書ききれないほどの体験をしました。まだまだ書きたいことはあります、だらだらとした文章になってしまふので、ここらへんに筆を置きたいと思います。

本当に貴重な体験をさせてくれた両親には感謝したいです。団関係者の人にもいろいろとお世話になりました。どうもありがとうございました。

最後に、自分はこれから学校を出て、社会へ進むことでしょう。また、スカウト活動もこれからは、リーダーとしてやっていくことになります。そんな中で今回いっしょにいったメンバー、森に宇井はじめちゃん、そして班のみんな、などなど多くの友人を得たことも収穫の1つです。みんなどうもありがとうございました。リーダーの皆さんも、いろいろと御迷惑をおかけしました。本当にありがとうございました。また、みんなで会って遊びましょう。

I'll be back someday again.

Thank you my all friends.

誤字・脱字・その他かんべんしてください。

オーストラリアに 行って

ウォンバット班 日立5団 星野 忠 敦

まず、思い出されることはなんといっても広くて豊かな自然です。これにはとても驚きました。キャンベラには、野生のカンガルーがいっぱい、ハ工も沢山いました。ハ工は牛や羊を飼うには必要な生き物だそうで、とてもこまったことを覚えています。

あと、ホームステイは、子供2人に両親の4人家族のところに2日間おせわになりました。そこの子供とはいいろいろ遊びをして楽しみました。

1つ感じたことは、料理の味がうすいことでした。日本とだいぶ違うんで、惑ってしまいました。

3月28日からキャンプに入りました。1日目は、とても疲れていたような覚えがあります。2日目からは、楽しくいろいろなことをやりました。

まずは、動物園に行き見学しました。これまた、不思議な動物がいました。我が班名の動物のウォンバッ

トはすごくかわいくコアラよりずっと見入ってしまいました。ワニは寝ていてあいそわるかったです。ウォンバットは1匹もらって帰ってきたかったくらいです。

キャンプの最後の夜にロッククライミングという、岩を下っていくのをやり、本当にオーストラリアに来てみてよかったですとつくづく感じるくらいのものでした。

最後の2日間は最高でした。まず、日立7団の宇井と2人でダーリングハーバーを周りました。その時2人で銀行に入り閉店時間のためドアが閉じました。その時僕だけが中に閉じこめられてしまいハラハラしましたが、楽しかったです。

次の日は、水族館を見て、あとは買い物をしました。買い物を免税店でしたんだけど、けっこう高くてサギみたいな事をされました。もうあそこには絶対に行かないだろう。

オーストラリア 派遣団に参加して

エキッドナ班 岩井1団 鶴見 一

オーストラリアという国について何も知らなかった。それは勉強ができないせいもあるが、今まで16年間、海外どころか飛行機にすら乗ったことがなかったので、「遠い国」という印象だけだったからである。

突然、長沢隊長からお話をあった。「今度、茨城県でオーストラリア派遣がある。参加してみないか?」と。その時はまさか行けると思っていなかった。が家の人に相談すると「自分が行きたいなら行かせてあげよう」とOKの返事をくれた。その時は感謝するのも忘れていろいろと希望に胸を躍らせていた。しばらくするとそんな気持ちもさめつつあったが、やはり出発直前は自然にほころんでしまう顔をごまかすのが大変だったのを覚えている。

生まれて初めて使うパスポート、そして初めて乗る飛行機。離陸する時には思わず歓声を上げてしまった。オーストラリアのケアンズ空港に乗り換えるため1度降りた。目的地についたわけではないが、オーストラリアに着いたわけだった。が、しかしまったく実感がなかった。そしてシドニーへ。シドニーに着いてから今度はまたプロペラ機で首都のキャンベラまで飛んだ。さすがに3連続で乗ると疲れたが、時折見える地上の景色や美しい雲に感動していた。雲に感動したのは生まれて初めてだった。

空港に着き降りるとバスで移動し、ホームステイ先の家族の人達と公園で食事を取った。その時初めて外

国へ来たのだと感じた。公園は広く、みんながくつろげる場所であり、日本ではあまり親しまれていないサイクリングなどを小さい子供から大人まで楽しんでいるのだ。僕たちのホームステイ先はMr. Noelさんという方の家だった。彼の家にはプールがあった。「泳ぐか?」と僕たちに聞いた。僕は冗談で言っているかと思った。が彼は本気だったらしく泳ぐことになった。書き忘れたが、彼の家にはMrs. Janさんという奥さんとLeanne姉)とLeon(弟)という姉弟がいた。そのリアンとレオンもいっしょに泳いだ。言葉なんか必要なかった。何か通じ合う気持ちを感じた。食事時には食文化の違いについておどろきがあった。日本ではおやつ感覚で飲んでいるコーラ、サイダーなどがディナーやランチに出るのだ。しかも3ℓと日本の2倍の容量のペットボトルが数種類置いてあった。また、割りばしを出しててくれるなどの気づかいがあったのがとてもうれしかった。「割りばしはいつも使うの?」と聞いたら「Sometime」と答えてくれた。そんなホームステイもアッという間に終わってしまった。ホストファミリーと別れるのはとてもさみしかった。たった2日間だけれどいろいろと世話をしてくれたみんなに感謝の気持ちや驚いたこと感動したことなどを伝えたかった。だけどそれらを伝えられなかつ自分にもどかしさを感じた。もっと英語を勉強しておけばよかったと。そして「Thank you for everything」とありったけの思いを込めて言った。また、いつか会えるといいなあ。

ホームステイが終わり、キャンプが始まった。キャンプはなれているから大丈夫だと思っていたが、一度日本に帰りたいと思った日があった少し疲れていたのだろう。キャンプはキャンプでまた違った角度からオーストラリアを見ることができた。きれいな鳥を見たり、見たこともない木や花を発見したりと。また、ハイキングすることで町並みや家の作りなどをゆっくり見ることができた。キャンプも長いとは思っていたが、終わってみると本当にすぐ終わってしまった。最後はホテルに泊まりゆっくりくつろいだ。そして気がついたら飛行場にいた。機内では疲れて眠ってしまった。日本に帰ってきててしまった。振り返ってみると初期の目的であった豪州の文化を目で見て、耳で聞いて、肌で感じてくるということ、また豪州のスカウト達と交流をし国際社会に生きる人間としてプラスになることを少しでも得てくるということの2つを、概ね達成することができたと思っている。これらを達成することができたのは、本当に多くの人々の努力があったお陰だ。両親、県連の方々、JTBの方、豪州の方々、全ての人々に感謝の気持ちを込めて
「弥栄」

オーストラリアに 行って

エミュー班 日立5団 富山 豪

オーストラリアに行って初めて感じたことは、緑がとても多いということでした。また、街の中ではゴミが全くないというほどきれいでました。そして行く前の一番の問題であった英語は通じず、聞き取れずで大変だったので、今度海外へ行く場合があつたらちゃんと勉強してから行こうと思います。

ホームステイの時は、まずみんなと別れてホストファミリーのところの車で大使館を周ってから家へ向かいました。そしておみやげをわたして、自分の住んでいる街のことを話してから子供達と遊んで5時頃夕食を食べました。そして夕食の後も話をして、疲れてしまつたのでシャワーも浴びずに寝てしまい1日が終りました。

2日目はむこうのスカウトハウスに集まり、その後日本大使館へ行きました。そこで公使の話を聞いてから、バスでいろいろな所をまわって夕方頃スカウトハウスに戻りました。その後ホストファミリーと外食をしてから家に戻り、その日の話やゲームなどをしながらシャワーを浴びて寝ました。このようにして2日間のホームステイが終わりましたが、自分ではもっと交流を深めたかったと思っています。

今回のオーストラリア派遣を通して、ホームステイのホストファミリーやむこうのボーイスカウトとの交流など、いろいろな体験をさせてもらいました。そしてこのような体験の機会を与えてくれた県連の方、日立5団の方及び両親に感謝します。



野生のカンガルーを追って

オーストラリアに 行って

ウォンバット班 日立5団 高橋理仁

今回のオーストラリアの11日間は、とても充実して楽しかったです。

まずは飛行機です。初めてだったため緊張しましたが離陸、着陸の時のフワッとした感覚で少し気持ちが悪くなりましたがあとは大丈夫でした。行きは飛行機を3回乗りかえてやっと首都キャンベラに着きました。

予定ではホテルへ行ってからホームステイの方と昼食会のはずが、対面式を終わってすぐ湖のある近くのある原っぱで昼食会をやることになりました。また、行く前に決まっていたホームステイの組も、向こうの都合で変わってしまいました。当初2人1組だったのが1人になってしまった人が多かった中、幸運にも自分は、組む人は変わったが本多君という偶然にも同じ学校の人と組みました。ホームステイの家族は4人で3日間の間お世話になりました。日本ではあまり知らないホッケーというスポーツを観に連れていってもらったりしました。しかしここで一番の不安が的中しました。それは英語です。話しかけられてもあまり解らないし、話しかけても通じない。同じ班の本多君に何度も助けてもらいました。英語がスムーズにできる彼に同じ学校として恥ずかしかった。このホームステイで感じたのは、とてもゆったりしているのだ。特に食事なんかは、とりわけ時間を使う。のんびりやの自分にはちょうどあっていました。

一方ホームステイやキャンプをしている間、さまざまな行事に参加したり、各所を見学した。

ブルーマウンテンは、その名の通り、遠くから見ると山が青く見え、風景も素晴らしい。動物園もカンガルーやコアラが本当に身近に見ることができ、オーストラリアでしか見られない動物は多数いた。日本で見る動物園とは、どこか違っていた。

又、みんなで盛り上がった隊營火、そしてめったに入れないということで緊張しながら訪問した日本大使館などさまざまな事がありました。自分が今回の派遣で一番印象に残ったのは、ロッククライミングだった。ちょうどその日の夜は、2つに行事が分れていて、約半分の人数に分かれて、自分は、ロッククライムの方にした。まさかこんなところで体験できるとは思わなかったので期待と不安が入り混じっていた。2回ぐらいいいところで練習して高さ15mのところを降りる

ことになった。自分は最後という事もありとても緊張した。下からのライトだけがたよりだったが、かなり高く見えた。慎重に練習の時のようにした。30秒~1分ぐらいかかって下に着いた。自分には、長く感じた。そして何とも言えない感動を覚えた。今回は降りるだけだったが、日本ではあまり体験できなかつた事を体験できたのでとてもうれしかった。

11日間という間は長いようで短かった。最初不安だったのが最後の飛行機では充実感にひたっていた。たくさんの体験ができたのもうれしいが、友達がたくさん作れたのもうれしい。この体験を生かし反省点を直していく、今後の生活に生かしていきたい。今後は英語を話せるようになってからもう一度オーストラリアに行きたいと思う。

最後に今回の派遣においてさまざまな人達にお世話になりました。ありがとうございました。

オーストラリア！

エキッドナ班 日立5団 佐々木 貴史

オーストラリアに着いてすぐ、ホームステイだった。2人でホームステイすることになっていたので、あまり気にはしなかった。そして次々とホームステイ先が紹介されていった。僕たちの番になったので、行ったけれど、「君ホームステイ1人だよ」と言われたときとても、ショックだった。これから1人で、2日間はどうやっていけばいいかわからなかった。

ホームステイ先に着いた時、これから2日間もお世話になるのかと思うととても不安だった。その日は、とても緊張していたので早めに寝かせてもらった。

次の日、集合場所にみんなが集まってきたときはうれしかった。帰りたくないと思っていた。ホームステイ先に戻ったときは、けっこう遅くなっていた。夕食を外でとり、そしてシースカウトの集合を見学しに行ったからだった。スカウトハウスの中には、カヌーがたくさんしまってあった。カヌーで遊べるなんてとてもうらやましかった。最後の夜という事もあって、二日目の夜は遅くまで一緒にカードゲームやボードゲームなどをし遊んだ。あまり話はできなかつたけど、しばらくしてウノが出てきた時は、これなら言葉がわからなくても一緒に遊べると思った。その日は楽しく夜まで遊んだ。ホームステイ先の家族が、少し日本語を話せたのでとても助かった。

ホームステイ先の家族との別れが近づいてくると、

まだ別れたくないもう少し一緒にいたいと思い始めた。終えた時、1人で良かったなあとなぜか思っていた。

キャンプが続く中で、とても印象に残ったものは、インドアクリミングというものだった。インドアクリミングと言うから、中でおこなうスポーツだとばかり思っていた。しかし、実際は違っていた。ロープを使って外でするものだった。練習の時はそれほど恐くなかったけれど、いざ本番という時とても高くて恐かった。1度目の時はそれほど恐くなかったけれど、もう一度やってみたいと思った。2回目は、1度目とは違ってうまく下がることができてうれしかった。精神的にとても疲れたけれど、とてもスリルがあっておもしろかった。

どれも、僕が今までにやったことのないとても素晴らしい体験だった。

オーストラリアに行って、いろいろなことをしたけれど、この2つが印象に残った。オーストラリアに行って良かった。そして、もう一度いつの日か行ってみたいと思う。Good day

オーストラリア派遣 について

T. デビル班 日立5団 小 又 淳

ホームステイ。5人で住んでいる、男の子と女の子の3人兄妹。皆顔見知りもせず親切してくれた。家は広い。そして庭も。母さんは、日本語を話せる。少しだけだったが嬉しかった。父さんは、面白い人だ。男の子二人は話し易かったが、女の子は違った。自分が、実はシャイな奴だという事に気付く。

その日の夜、質問を浴びた。私の家族、学校、そしてオーストラリアの感想が主だった。初め、英語の会話にとまどったが、すぐ慣れた。その後、父さんの親友の家に行った。おじさんは畳上げが好きで色々な畳を見せて貰った。その家の男の子は、日本語も話せたので驚いた。帰る時、オーストラリアのカレンダーを貰った。初めて会ったのに、おじさん達も親切だった。日本に居た時には感じなかった優しさを、会ってすぐに感じる事が出来た。

次の日の朝、皆で昼食を作った。父と母は会社、兄妹達は学校、私はスカウティングに行かなければならない。母がスカウトハウスまで送ってくれた。

帰ってきて、すぐ夕飯。最後の夜は、Dinnerと呼べる位豪華だった。夕食後、プールへ行った。2mのプ

ールには驚いた。帰ってから、遅くまで会話を楽しんだ。翌朝、学校に兄妹達を送りながら別れを告げた。

合同ジャンボリー。出し物が、ダンスと歌だった。その後に、数分間のトークがあった。すべては聞き取れなかつたが、大部分き聞き取れた。おもしろい話だったので最後まで聞いた。終わって友達を沢山作った。チーフの交換もした。1度テントに戻ってから、団子をあげた。これは、あまり良くなかつたようだ。知り合った女人とおやすみのキスをして、私はテントへ戻った。

最後のホテル。一通りのスカウティングを終え、買い物を楽しんだ。レザー商品の店の人と知り合いになった。寝る前に一緒に写真を撮ってキスをした。夜遅くまで友との話に盛り上がっていた。次の朝も彼女に会って、アドレスを交換した。バスで出る前にもキスをしてしまった。最初のシャイな私はどこへ。見送ってくれたので嬉しかった。

色々あったけど楽しかった。オーストラリアに住みたい。

Good day

T. デビル班 日立5団 千 葉 功

3月25日に、僕は日本を出発した。今考えてみると、その時の気持ちちは不安と期待でいっぱいでした。

そんな気持ちの中で不安が強く感じられた。それは、自分で話す英語のことです。僕は、全く英語が話せないので、「自分は、オーストラリアの生活についていけるのだろうか」と心の底で思っていた。

期待はというと、自分の好きな外国オーストラリアの文化や生活を知ることが大きな期待でした。

僕は日立5団に所属しています。メンバーは6人です。僕らは、ニュージーランドとオーストラリアかを選択することができました。ですが、メンバー6人の意見が一致したのでオーストラリアに決めました。

さて、前置きはここまでにして、当日。約2時間半バスに乗り成田空港に着いた。参加者は、約30人と多かったです。今、思うとあんなに多くの人々が集まる空港で行ったのは少し恥ずかしいと思います。

飛行機に乗り込んで8時間、まずケアンズに着きました。そこからまた飛行機で1時間、キャンベラに着きました。まずホームステイ先の家族と会い、昼食をとり、派遣団とオーストラリアのボーイスカウトと国會議事堂を見学しました。ここでは、素晴らしいことを学びまし

た。それから僕にとっては地獄のホームステイが始まりました。1日目は緊張していて全く話せませんでした。自分の方から声をかけるというのは、もってのほかでした。夕食も緊張していてあまり食べられず睡眠を待ちました。次の朝、2日目は、「Good Morning」と声をかけられて目が覚めた。2日目は慣れてきたのか自分の方から少しずつ声をかけることに成功し、やっと自信がついてきました。この日は、大使館に行き公使に会うなどの行事が会ったのであまりホストファミリーの人達と会話することがなかった。3日目は、ホストファミリーとは最後の日でした。ホストのお母さんが学校の先生だったので高等学校に連れて行ってもらいました。日本の学校と全く違う生徒が皆健全でした。みんなのホストの人達が見送るなかシドニーに向かいました。キャンプが控えてましたが、ホームステイで疲れてしまいそれどころではありませんでした。

すごく辛かったですがとてもためになる派遣だったと思います。これを読んでいるみんなに勧められる派遣なのでぜひ参加して下さい。もう一度行きたくなるような派遣でした。

豪 州

エキッドナ班 日立7団 宇 井 貢

オーストラリアを肌で感じる

これがこの旅の目標だった。しかし、この目標は、キャンベラ上空を飛行中に達成されてしまった。なぜなら飛行機の空から見たオーストラリアは、地面が永遠と続く、とてつもなく雄大なものだったからだ。

そのことは、何処へ行っても同じことだった。ホームステイ先へ行っても、キャンプ地でも、街中でも、車で走っていても、オーストラリアのすごさは、肌ではなく、体で感じることができた。

今回オーストラリアに行ってみて、気付いたことは、大きさはもちろん、オーストラリアの人々が気さくで、いい人達ばかりだということだ。道で声をかけても、船の上から手を振っても、みんなそのことに気軽に答えてくれた。ホームステイ先の家族の人も、英語があまりしゃべれない私たちに、やさしく接してくれて、とても心よく二日間と一緒に過ごすことができた。

キャンプ中にも、オーストラリアのスカウト達と交流でき、日本との進級章や教育課程の違いを知ることができた。

ハイキングやキャンプファイヤーの時には、派遣団

の仲間たちの意外な一面を発見したり、深い交流ができたと思っている。

初めて飛行機に乗り、初めてのオーストラリアで、初めてコアラやカンガルーに触れた。この何もかもが初めてずくしだったこの旅で、とてもとても楽しい思い出ができた。この思い出は、一生の宝物にしたいと思う。

そして、仲間たちと誓い合った、また来年オーストラリアに来る、ということを実現したい。

T. デビル班 勝田1団 本 多 寛 之

僕がとまつた家は、4人家族でナタリーとベンという姉弟がいました。家は静かな住宅街にあり、夜になるとシーンとして耳がいたくなるような所だった。そのため朝方に鳥の声で目が覚めてしまうこともありました。

ホームステイ先の家族は僕たちに親切でした。僕達もすぐに打ち解けて一緒にテレビの番組のことや、音楽について。バスケットボールやローラーホッケー、ボイスカウトの活動、はたまた宗教やファミコンまでいろんなことを話し合いました。そうそう、お土産に持っていたペーゴマの投げ方や紙鉄砲の作り方なども教えたりもしました。ベンは特に紙鉄砲を気に入ったようで、パンパン鳴らし過ぎてうるさいくらいでした。

いつになるかわかりませんが、もう一度オーストラリアに行った時、この家へ行けたらいいなと思っています。



キャンベラ連盟野営場にて

オーストラリア 派遣感想

エミュー班 水戸4団 東 篠 裕

1995年3月25日、20時半、我々第6回茨城県連盟シニアスカウト海外派遣隊は、第1回オーストラリア派遣のため成田空港、日本を出発した。そして、その10日後帰ってきた。今考えるとただそれだけ、なんて思えたが、その10泊11日、内キャンベラでの2泊のホームステイ、5泊6日のシドニーでのキャンプでは、ただそれだけでは済まされないような貴重な体験をしたと思う。だから、この11日に関わったリーダー、JTBの方々、キャンプを通して仲間になった他の隊のスカウト、そして費用を出してくれたり、色々なことで協力してくれた両親、家族に「ありがとう」と感謝の言葉を述べたい。

さて、まずオーストラリアに着くと縁が多く、とてもきれいな国だと気付いた。そして、そんな縁の中でホームステイ先のマーガレット・ライアンさんと、その娘のサーリーと昼食を食べた。さすがに空気が良く、成田では緊張して何回もトイレに行ったが、そんな緊張もなくなり、とても親切で友好的な人達だったので安心した。ライアンさんの家は、4人兄弟で合計6人と犬が2匹と猫が2匹のとても心の温かい家族だった。そこで3日間お世話になったのだが、ほとんど昼間は隊の方で観光等か入っていて少しこミュニケーションが取れなかつたので、できることならもう一度くらいホームステイしたいものだと考えている。

そして、その後のキャンプ。最初あまりとけこめなかつたが、ほとんど同学年だったので2日目ごろから仲間になれて良かったと思う。特にみんないい人だったので少しくらいの苦にも夜の馬鹿騒ぎで忘れられたりもした。そしてそのキャンプ場でのオーストラリアのスカウトの交流もとても楽しく、おもしろい人がたくさんいてとてもフレンドリーな感じが印象に残り、日本人をすぐに受け入れてくれたことにすごく感動した。

他にプログラム等は色々あったが。インドアクリミングが良かったと思う。これは名前とは逆に、15メートルほどの絶壁をロープ一本で、しかも夜にやってるのでとてもスリルがあつて日本ではなかなかできないことをやつたので良かった。他に動物園でコアラを抱いたり、近くからカンガルーを見たりなどオーストラリアならではのことがたくさんあった。

オーストラリア派遣は一回目だそうだが、行けて本当に良かったと思う。そして後輩達にもオーストラリアでこんな貴重な体験をさせてあげたいので、第2回派遣、第3回と続けてほしい。

Dear my Friends

エミュー班 勝田1団 川崎篤之

面積771km²、人口7681万人、人口密度2人/km²といつた広大な国、オーストラリア。土地も、空も、街も、道も、人も、コーラのLarge sizeも、全てが「大きい」と感じた。この国での9日間の生活。様々なことがあった。この全てを振り返るには莫大な時間を要するのでここでは一番印象深いホームステイの3日間をお世話になったGuerin家への手紙といった形でまとめてみよう。

Dear my Friends

昨日。日本へ帰ってきました。早速お手紙を書きます。

ホームステイの期間中は大変お世話になりました。ほとんど家族の一員として僕たちを受け入れて下さつたこと、大変感激しました。おかげ様で僕たちも気張ることなくアットホームな雰囲気の中、楽しく過ごすことができました。

楽しい時間の中で最も印象に残っていることは家族のみんなと行った住宅の丘の上までの散歩でした。実際にそこに野生のカンガルーが生息していたこと、大変感激し、鳥肌が立つほどでした。

それからお父さんが教えてくれた南十字星。日本では街のネオンなどで星の輝きを見ることは難しくなつてきてているのですが、キャンベラの静かな夜にくっきりと浮かぶ大十文字は素晴らしいものでした。（南十字星を見るのは僕の夢だったのです）

Anne（お母さん）。あなたには本当にお世話になりました。超豪華なお弁当。「風邪ひかなかつた？」と声をかけてくれたこと。18才以上しか入れないサウナで「年齢を聞かれたら『18才です』って答えるんだよ」と教えてくれたこと。そして様々な心配をしてくれたこと。どうもありがとうございました。

Katherine(14才♀)、そしてワンパク息子のJim(11才♂)。君たちとは本当に良く遊んだね。辞書を片手に英語と日本語で遊んだり、じゃれ合ったり。そしてプールで大騒ぎしたり、、、おんまりはしゃぎすぎて

お母さんに怒られたこともあったね。とにかく君たちと遊んでいるときが一番楽しかった。2人とも学校があったから……もっと遊びたかったんだけどな。またいつか遊ぼう！

最後にSteve（お父さん）。あなたは僕らにいろいろなお話をしてくれましたね。カンガルーのこと、街のこと、星のこと、鳥のこと。興味深いことばかりでとっても楽しかったです。どうもありがとう。

日本へ帰ってきて、再びオーストラリアという国を感じたような気がします。オーストラリアという国はとにかく広大で、美しくて、静かで……何もかもが素晴らしい国でした。特に強く感じたのは街の美しさと空の青さです。この2点は日本のものとは比べものにならないくらいでした。このような素晴らしい国で生

活しているあなた達が本当にうらやましく思います。今、僕はあなた方の様な生活をすることに憧れています。そして、まだ日本へ帰って数日しかたっていないのですが、オーストラリアへ行きたくて仕方がありません。これをきっとHomestay-sickとでも言うのでしょうか。又、大学へ入学した後にあなたの国を訪れようと思います。その時、再びお会いできることを楽しみにしています。

それでは、See you again!!

弥 栄

7 April 1995

Atsushi kawasaki

茨城県でウッドバッジ 実修所を開設

2年前から、茨城県内で実修所を開設して、多くの指導者が実修所に入所出来ることを「夢」見ておりましたが、日本連盟指導者養成課のご指導により、9月12~17日に土浦市「土浦青少年の家」でカブスカウト課程第104期を開設することが出来ました。

星野信二所長（大阪連盟・日本連盟L.T）のもと22名が履修しました。

茨城県からは入所生12名、所員として小林成敏さん、津久井一茂さん、コーダーマスターとして、急にお願いした若生悦男さん、コーダーマスターフード（食糧担当）として北岡 隆さんにはお忙しい中をご奉仕いただきまして厚くお礼申し上げます。

特記すべきことは、奉仕隊として台風の中を奉仕された阿見第1団のローバー隊と中島副長のご尽力は、所長からも称賛の言葉がありました。

また、陰でご奉仕いただいた武田指導者養成委員長と第5区地区の皆様にも心からお礼申し上げます。

富士スカウトの塙本君 英国で活躍

スカウティング茨城第10号でお知らせした、茨城県の富士スカウト第1号の水戸第4団の塙本 崇君は、現在ロンドン大学国際政治学科の学生として、ロンドンに在住されているが、この7月に帰国され県連事務局を訪問されました。

現在、ロンドンのシースカウト隊の副長として、学

業のかたわらボーイスカウト活動に奉仕されています。

既に、英国で指導者講習会を修了され、近く研修所に入所されるとのことでした。

ボーイスカウト発揚の地として知られる「ブラウンシー島」にも渡って来たとのことで、ブラウンシー島の写真集をいただきました。

また、「ギルウェル野営場」にも訪問されたそうです。

今年4月に県副コミッショナーの津久井一茂さんが、英国出張の際ロンドンで塙本君と逢い、活躍振りの報告がありました。

塙本君のこれからのご活躍を心から祈念いたします。

編集後記

3月末からの第1回のオーストラリア派遣の特集号として編集しました。

この派遣を計画した本人として日本連盟を通じて何回も連絡を取りながら、派遣を実施したものの果たして、参加したスカウトたちが満足出来ただろうかと心配していましたが、この特集号を見て第1回としては成功裡に終わったことと思っています。

親身になって、歓迎して下さったキャンペラのホストファミリーの皆様に感謝いたします。

また、この派遣に際して豪州との連絡に陰ながらご協力下さった、日本連盟の国際課の皆様にも厚くお礼申し上げます。

現在、派遣団で広報を担当した中島さんが報告写真集を作成中ですので、後日各団にお送りする予定です。

（広報 堀江）